

**「精神科領域の診療ガイドラインに関する
オンライン調査」
報告書**

主催：みんなねっと／協力：コンボ、すきゾ！／解析協力：EGUIDE プロジェクトチーム

はじめに

診療ガイドラインとは、病気の治療や対応について、科学的な証拠（エビデンス）をもとに、効果が高く安全と考えられる方法をまとめた「治療の道しるべ」です。精神疾患は個別性が高く、治療においては当事者やご家族の視点を反映することが不可欠です。より良い診療ガイドラインを作成するためには、実際に治療を受ける立場にある方々のご意見を広くお聞きすることが重要であると考えました。しかしながら、診療ガイドラインが実際に当事者やご家族の皆さまにどのように受け止められているのか、どの点が役立っているのか、どこに改善の余地があるのかについては、これまで十分に把握されてきたとは言えません。

このような問題意識のもと、公益社団法人 全国精神保健福祉会連合会（みんなねっと）さまが主体となり、認定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構（コンボ）さま、および統合失調症 Line グループ「すきゾ！」さまのご協力のもと、当事者・ご家族・支援者の皆さまを対象としたオンライン調査を実施いたしました。解析には EGUIDE プロジェクトチームが協力いたしました。

本調査にあたっては、2025年9月に開催された「みんなねっとフォーラム」において、EGUIDE プロジェクトが診療ガイドラインに関する講演を行い、その内容を後日も視聴可能な形で公開しました。ご回答者の皆さまには、この講演をご視聴いただいたうえでアンケートにご協力いただいております。したがって、本調査の結果は、診療ガイドラインについてあらかじめ一定の情報を得たうえでの当事者・ご家族の声であることにご留意ください。こうして、267名の皆さまよりご回答を賜りました。（フォーラム詳細：

<https://seishinhoken.jp/events/01k4xq0420nva9wxrknb1ts7z9>）

ご多用のなか本調査にご協力くださいました皆さまに、心より御礼申し上げます。本報告書が、今後の診療ガイドラインの改善と、精神科医療における当事者・ご家族の参画の一助となれば幸いです。

【本報告書の引用について】

本報告書は、当事者・ご家族をはじめ広く関係者の皆さまにご活用いただくことを願って作成したものです。出典を明記いただければ、営利・非営利を問わず、ご自由に引用・ご利用いただけます。引用の際は、出典として「『精神科領域の診療ガイドラインに関するオンライン調査報告書』（公益社団法人 全国精神保健福祉会連合会〈みんなねっと〉ホームページ掲載）」とご記載ください。

目次

はじめに	1
目次.....	2
I. 調査の目的.....	3
II. 調査の概要.....	4
III. 結果報告	
3-1. 回答者の属性.....	5
3-2. 診療ガイドラインの認知度.....	6
3-3. 診療ガイドラインに対する考え.....	7
3-4. ガイドラインの有益な点.....	9
3-5. ガイドラインの問題点	10
3-6. 自由記載の結果	11
IV. まとめと考察	12
資料	
【資料】 集計表	15
【資料】 調査票	18

Ⅰ. 調査の目的

本調査は、精神科領域の診療ガイドラインの有用性や課題について、当事者・家族・支援者の意見を広く把握することを目的として実施した。なお、「はじめに」で述べたとおり、回答にあたっては事前に EGUIDE プロジェクトによる診療ガイドラインの内容紹介の講演を視聴いただいたうえで、アンケートにお答えいただく形をとった。

診療ガイドラインとは、病気の治療や対応について、科学的根拠（エビデンス）をもとに効果と安全性が高いと考えられる方法をまとめたものであり、医療者と当事者・家族が治療を選択する際の参考として作成されている。

本調査では、以下の3点を具体的な目的として設定した。

1. 精神科領域の診療ガイドラインに対する当事者・家族・支援者の認知状況（講演視聴前）を把握すること
2. 診療ガイドラインの有用性や課題について、当事者・家族・支援者がどのように考えているかを明らかにすること
3. 得られた知見を、より良い診療ガイドラインの作成および普及に活かすこと

II. 調査の概要

1. 調査対象

精神疾患の当事者、当事者の家族、および支援者を対象とした。公益社団法人 全国精神保健福祉会（みんなねっと）、認定 NPO 法人地域精神保健福祉機構（コンボ）、および統合失調症 Line グループ「すきゾ！」を通じて調査への協力を依頼した。

2. 調査期間

2025 年 9 月～2026 年 3 月

3. 調査方法

Google フォームを用いたオンライン調査（無記名式）により実施した。みんなねっと、コンボ、すきゾ！を通じて QR コードまたは調査 URL を配布し、回答を収集した。

4. 回収状況

267 名より回答を得た。

5. 倫理的配慮

本調査は無記名式で実施し、個人の特定につながる情報は収集しなかった。回答は任意であり、得られたデータは統計的に処理したうえで、個人が特定される形での公表は行わないこととした。

6. 調査票の構成

調査票は全 23 問で構成した。回答に要する時間は約 10 分であった。調査項目の内訳は以下のとおりである。

- ・ 診療ガイドラインの認知度に関する質問（1 問）
- ・ 診療ガイドラインに対する考えに関する質問（17 問、5 件法）
- ・ 診療ガイドラインの有益な点に関する質問（1 問、複数回答）
- ・ 診療ガイドラインの問題点に関する質問（1 問、複数回答）
- ・ 回答者の属性に関する質問（3 問：性別、年齢、立場）
- ・ 本調査へのコメント（自由記載）

III. 結果報告

3-1. 回答者の属性

本調査には計 267 名から回答を得た。回答者の属性を図 1～図 3 に示す（詳細な集計表は巻末資料編を参照）。

性別では、男性 72 名（27.0%）、女性 189 名（70.8%）、その他 6 名（2.2%）であり、女性が約 7 割を占めた。年代別では、60-69 歳が 67 名（25.1%）で最も多く、次いで 50-59 歳が 66 名（24.7%）、70 歳以上が 49 名（18.4%）であった。50 歳以上の合計は 182 名（68.2%）であり、回答者の約 7 割を占めた。一方、29 歳以下は 14 名（5.2%）にとどまった。

立場別では、「患者の家族」が 171 名（64.0%）で最多であり、「患者」が 79 名（29.6%）、「支援者」が 14 名（5.2%）、「その他」が 3 名（1.1%）であった。

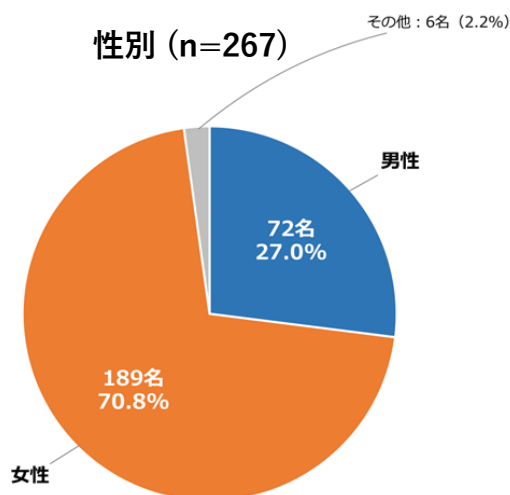


図 1 回答者の性別

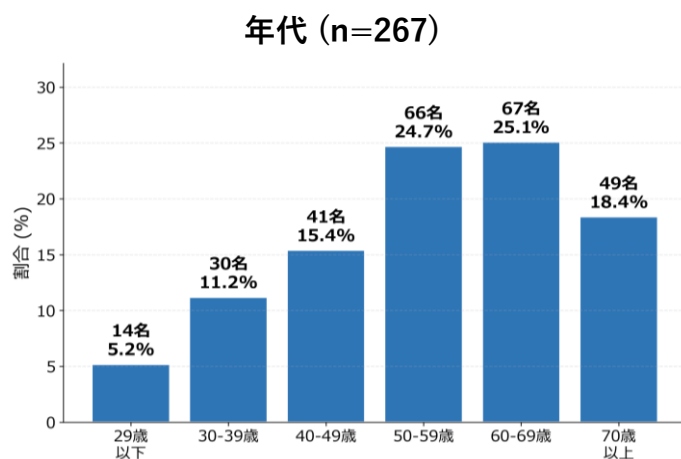


図 2 回答者の年代

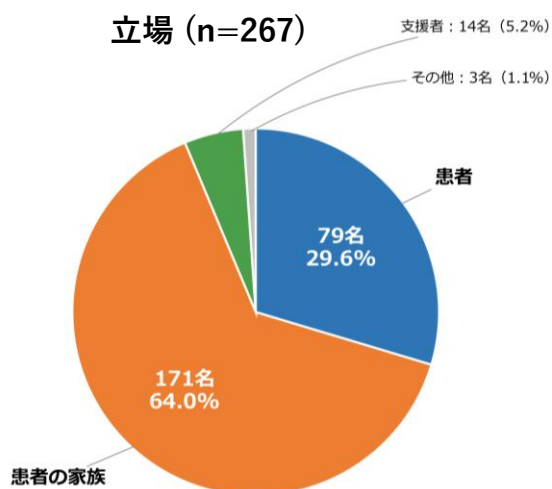


図 3 回答者の立場

3-2. 診療ガイドラインの認知度

「診療ガイドラインの存在を知っている」に対する回答は、「まったく知らない」76名(28.5%)、「あまり知らない」81名(30.3%)、「少しは知っている」75名(28.1%)、「かなり知っている」19名(7.1%)、「とてもよく知っている」16名(6.0%)であった。「まったく知らない」「あまり知らない」を合わせると157名(58.8%)が認知していない状態であり、「かなり知っている」「とてもよく知っている」を合わせた積極的な認知層は35名(13.1%)にとどまった。

診療ガイドラインの存在を明確に認知している当事者・家族は少数であり、「少しは知っている」を含めても約4割にとどまった。ガイドラインの普及・周知が大きな課題であることが示された。

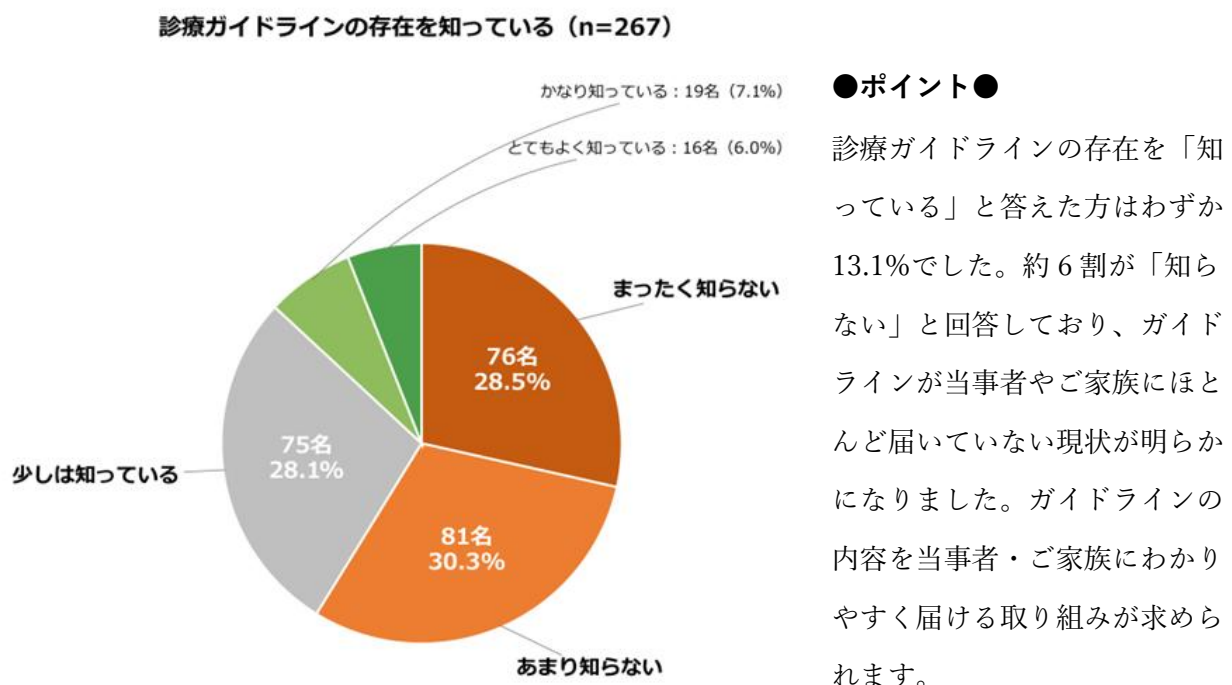


図4 診療ガイドラインの認知度

3-3. 診療ガイドラインに対する考え

17項目について、ガイドラインに対する考えを5件法（5：非常にそう思う／4：ややそう思う／3：どちらともいえない／2：あまりそう思わない／1：まったくそう思わない）で尋ねた。集計にあたっては、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を「あてはまる」に、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を「あてはまらない」に集約し、3段階に整理して示した。結果を図5に示す（詳細な集計表は巻末資料編を参照）。なお、「今の自分の状態に合わない」、「自分に合った細かい配慮が足りない」、「抵抗感がある」、「病気や治療の説明を受けてもよくわからない」の4項目は逆転項目であり、解析に際してスコアを反転処理し、肯定的評価が左側（「あてはまる」側）に位置するよう再構成している。

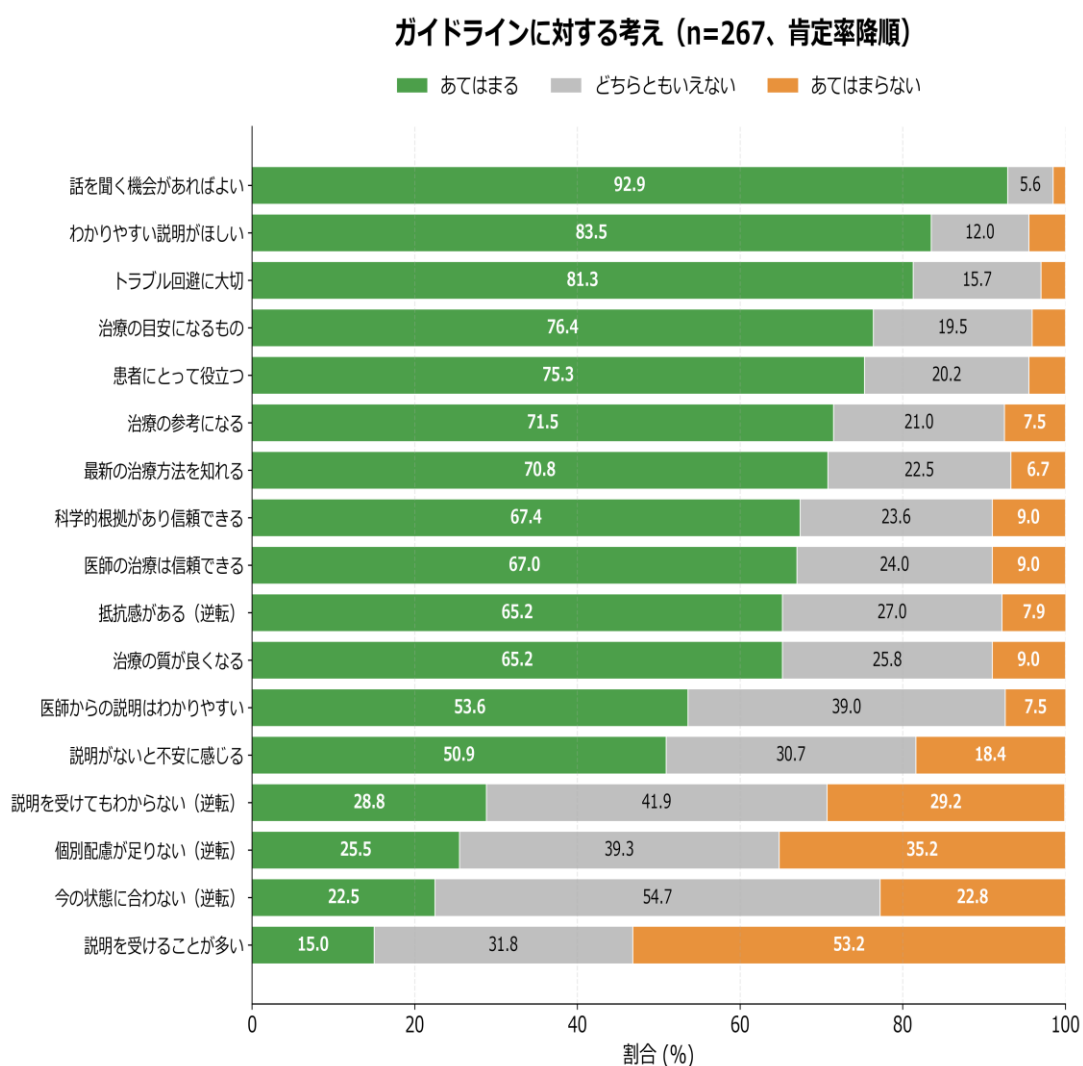


図5 ガイドラインに対する考え (n=267)

【ガイドラインへの高い期待】

肯定的評価の割合が最も高かった項目は、「話を聞く機会があればよいと思う」（92.9%）であった。次いで「内容をわかりやすく説明したものがほしい」（83.5%）、「トラブルを避けるためにも大切」（81.3%）が続いた。これら上位3項目はいずれも80%を超える高い肯定率を示しており、当事者・家族がガイドラインに関する情報提供やわかりやすい説明を強く求めていることがうかがえる。また、「治療の目安になるもの」（76.4%）、「患者にとって役立つ」（75.3%）、「自分の治療の参考になると感じる」（71.5%）も7割以上が肯定しており、ガイドラインの有用性や治療への活用に対する期待が高いことが示された。

【逆転項目の解釈】

「抵抗感がある」は反転後に65.2%が肯定側（＝抵抗感がない方向）に位置し、多くの回答者がガイドラインに対して抵抗感をもっていないことが示された。一方、「自分に合った細かい配慮が足りない」は反転後25.5%が肯定側（＝配慮は足りていると感じる方向）にとどまり、否定側（＝配慮が足りないと感じる方向）は35.2%、「どちらともいえない」が39.3%と最も多かった。個別配慮の不足を感じている回答者が一定数存在することが示唆される。

【現場での活用状況の課題】

「ガイドラインにそった治療の説明を受けることが多い」では、「あてはまる」は40名（15.0%）にとどまり、「あてはまらない」が142名（53.2%）と過半数を占めた。ガイドラインに基づく説明が臨床現場で十分に行われていない実態が浮き彫りとなった。

●ポイント●

9割以上の方が「ガイドラインについて話を聞く機会があればよい」と回答し、8割以上が「わかりやすい説明がほしい」と答えています。ガイドラインへの期待は非常に高い一方で、実際に「ガイドラインにそった説明を受けている」方は15.0%にとどまっています。「知りたい・活用したい」という強い希望と、「実際には届いていない」現状との間に大きなギャップがあることが、本調査の重要な発見です。

3-4. ガイドラインの有益な点

診療ガイドラインの有益な点について複数回答形式で尋ねた。結果を図6に示す（詳細な集計表は巻末資料編を参照）。

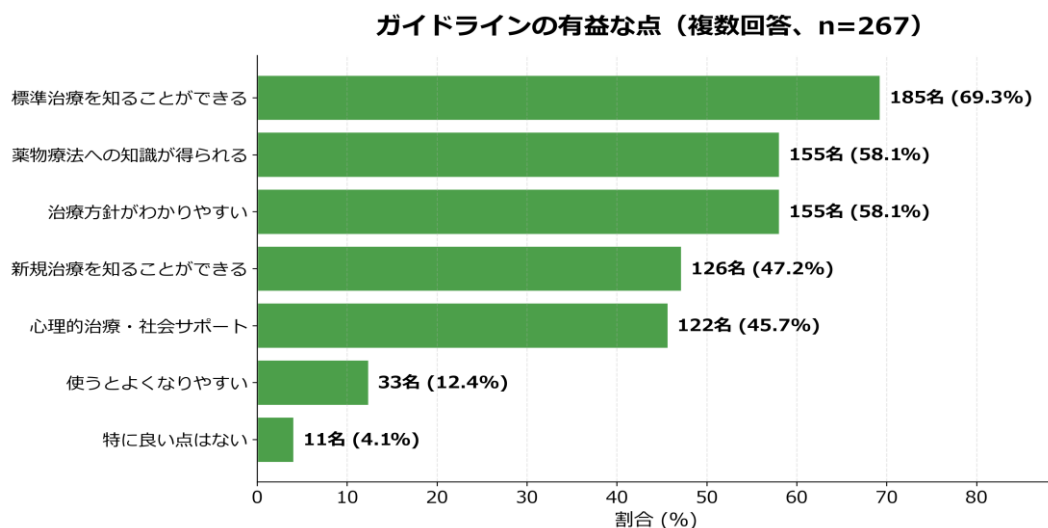


図6 ガイドラインの有益な点（複数回答、n=267）

最も多く選択されたのは「標準治療を知ることができる」（69.3%）であり、約7割の回答者がガイドラインの最大の利点として標準的な治療内容の把握を挙げた。次いで「薬物療法への知識が得られる」および「治療方針がわかりやすい」がともに58.1%で並び、薬物療法に関する情報提供と治療方針の明確化が同程度に評価されている。

「心理的治療・社会サポート」（45.7%）も約半数近くが選択しており、薬物療法のみならず心理社会的支援に関する情報源としてもガイドラインへの期待が高いことがうかがえる。一方、

「使うとよくなりやすい」は12.4%にとどまり、治療効果の実感には必ずしも結びついていない現状が示唆される。

●ポイント●

回答者の約7割が「標準治療を知ることができる」ことをガイドラインの最大の利点として挙げています。薬物療法の知識や治療方針の理解にも約6割が有益と感じており、ガイドラインは当事者・家族にとって重要な情報源として位置づけられています。心理的治療・社会サポートへの関心も約半数と高く、薬物療法以外の支援に関する情報もガイドラインに求められていることがわかります。

3-5. ガイドラインの問題点

診療ガイドラインの問題点について複数回答形式で尋ねた。結果を図7に示す（詳細な集計表は巻末資料編を参照）。

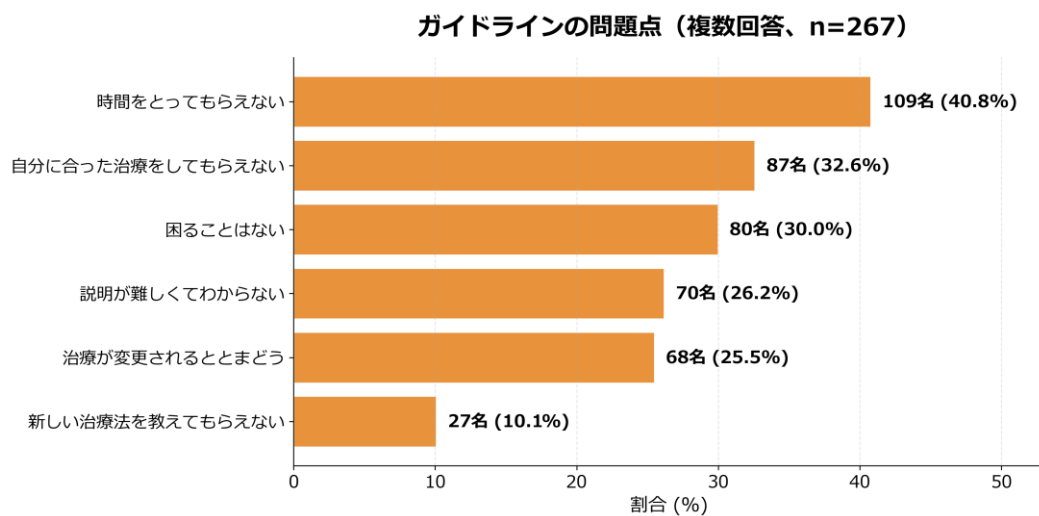


図7 ガイドラインの問題点（複数回答、n=267）

最も多く選択されたのは「時間をとってもらえない」（40.8%）であり、約4割の回答者が診療時間の不足を最大の課題として指摘した。次いで「自分に合った治療をしてもらえない」

（32.6%）が挙げられ、個別化された治療が十分に提供されていないと感じている当事者・家族が約3割存在することが示された。

「説明が難しくわからない」（26.2%）、「治療が変更されるととまどう」（25.5%）もそれぞれ約4分の1が選択しており、ガイドラインの内容が当事者・家族にとって平易に伝えられていないこと、また治療変更時の説明やサポートが不足していることが示された。

なお、「困ることはない」を選択した回答者が30.0%存在したことも注目に値する。約3割の回答者はガイドラインの使用に特段の問題を感じておらず、ガイドラインに対する評価は回答者によって分かれていることがうかがえる。

●ポイント●

ガイドラインの問題点として最も多く挙げられたのは「時間をとってもらえない」（40.8%）で、診療時間の短さが当事者・家族にとって大きな課題となっています。また、「自分に合った治療をしてもらえない」（32.6%）も高い割合を示しており、標準的な治療指針と個々の患者への対応との間にギャップがあると感じている方が少なくありません。一方で、「困ることはない」と回答した方も30.0%おり、ガイドラインの活用状況や主治医との関係によって評価が分かれていることがわかります。

3-6. 自由記載の結果

「本調査に関するご意見」（自由記載）には 15 件の回答が寄せられた。回答内容を以下の 6 つのテーマに分類して報告する。

(A) ガイドラインの普及・教育の不十分さ

ガイドラインが医師の間で十分に浸透していないこと、診療場面での説明が不足していることを指摘する意見が最も多かった。

「25 年間同じ精神科クリニックに通っている夫がいるが、そもそも診療ガイドラインの説明を受けたことがない。」

「ガイドラインがあっても受診の時に詳しい説明がないと意味ないような気がする。」

「ガイドラインを広めて、精神科の医師のレベルをあげてほしい。」

(B) ガイドラインと現実の乖離・個別対応への不安

ガイドラインが示す標準治療と、個々の患者の実際の症状・経過との間にある乖離を訴える声が複数寄せられた。

「ガイドラインを見ると、もう手遅れでどうしようもないよね、というのを痛感してしまい、かえって辛いです。悪くなってしまった慢性期の患者にとっても希望が持てるような事を研究してほしいです。」

「診療ガイドラインを精神医療に取り入れるとして、個人に合った個別的な診療ができるのか不安。診療ガイドラインがマニュアルのようなものにならなければいいと感じた。」

(C) 薬物療法の具体的問題

変薬に伴うリスクなど、薬物療法に関する具体的な問題を指摘する回答があった。

「変薬のリスクも記載が必要と感じます。精神科医療の標準化を図ってほしいです。」

(D) 患者・家族の参加と情報公開

患者・家族がより主体的に治療に関われるよう、情報公開や参加の機会を求める意見が寄せられた。

「精神科医療がもっと社会に開かれたものになって欲しい。」

「家族として、もっとこのガイドラインの勉強をしたいと思った。」

●ポイント●

自由記載では 15 件の有効回答が得られ、ガイドラインの普及・教育の不十分さを指摘する声が最も多く寄せられました。特に、「ガイドラインがあっても診療で説明を受けたことがない」という声は、認知度調査の結果とも一致しています。また、標準治療と個々の患者の実情との乖離に不安を感じる声や、変薬に伴うリスクなど薬物療法に関する具体的な指摘も寄せられました。当事者・ご家族が治療に主体的に関わりたいという意欲は高く、ガイドラインの内容をわかりやすく伝える工夫や、家族向けの学習機会の提供が今後の重要な課題です。

IV. まとめと考察

1. 結果の総括

本調査は、精神科領域の診療ガイドラインに関する当事者・家族の認識と意見を明らかにすることを目的として、みんなねっと（公益社団法人 全国精神保健福祉会）、コンボ（認定NPO 法人地域精神保健福祉機構）、統合失調症 Line グループ「すきゾ！」の協力を得てオンラインアンケートを実施し、267名から回答を得た。結果からは、以下の3つの重要な知見が浮かび上がった。

第一に、診療ガイドラインに対する当事者・家族の期待は極めて高いことが明らかとなった。

「ガイドラインについて話を聞く機会があればよい」と回答した割合は92.9%にのぼり、「わかりやすい説明がほしい」が83.5%、「トラブル回避に大切である」が81.3%であった。

第二に、このような高い期待とは対照的に、ガイドラインの認知度は極めて低い水準にとどまっていた。「ガイドラインの存在を知っている」と明確に回答した者はわずか13.1%にすぎず、「あてはまる」と「どちらともいえない」を合わせても約4割にとどまった。大多数の当事者・家族は、ガイドラインの存在そのものを明確には認識していなかったと考えられる。

第三に、臨床現場におけるガイドラインの活用も不十分であることが示された。「ガイドラインに沿った説明を受けることが多い」と回答した割合は15.0%にとどまり、大多数の当事者・家族は、日常の診療場面においてガイドラインに基づく説明を受けていないと感じていた。

以上の3点、すなわち「高い期待」「低い認知度」「現場での活用不足」の間に存在する大きなギャップが、本調査において最も注目すべき構造的な課題である。

2. ガイドラインの有用性に対する認識

ガイドラインの有益な点として、「標準治療を知ることができる」（69.3%）が最も多く選ばれ、次いで「薬物療法への知識が得られる」（58.1%）、「治療方針がわかりやすい」

（58.1%）が続いた。これらの結果は、当事者・家族が自身や家族の治療に関するエビデンスに基づいた情報を求めていることを明確に示している。

精神科領域においては、治療選択肢が多岐にわたり、また疾患の特性上、治療に対する不安を抱えやすい状況がある。そうした中で、診療ガイドラインが「標準的な治療とは何か」という指針を提供し、当事者・家族の治療理解を促進する役割を果たしうることが、回答者自身の声からも読み取ることができる。

3. 臨床現場における課題

ガイドラインの問題点としては、「時間をとってもらえない」が40.8%と最も高く、診療時間の不足が臨床現場における最大の障壁であることが示された。また、「自分に合った治療をしてもらえない」(32.6%)という回答も一定の割合を占めた。なお、5件法で尋ねた「自分に合った細かい配慮が足りない」(逆転項目のため反転処理後で評価)については、「どちらともいえない」が39.3%と最も多く、配慮は足りていると感じる回答者が25.5%、不足を感じる回答者が35.2%と、不足を感じる層がやや多い結果であった。これらの結果は、当事者・家族がガイドラインに期待する「標準的治療の提示」と、実臨床で求められる「個別性への配慮」との両立が、今後の普及における重要な論点であることを示唆している。

自由記載においても、普及・教育の不十分さが最も多く指摘されたテーマであった。「25年間同じ精神科クリニックに通っているが、そもそも診療ガイドラインの説明を受けたことがない」という声に象徴されるように、ガイドラインが当事者・家族に届かない背景には、①医師側におけるガイドラインの認知・活用のばらつき、②診療時間の制約による説明機会の不足、③当事者・家族向けのわかりやすい説明媒体の不足、という複数の要因が重なっていると考えられる。とりわけ、家族自身がガイドラインの勉強をしたいという能動的な姿勢は、治療参加の機会を望む当事者・家族の姿勢を強く示している。一方で、「困ることはない」と回答した割合が30.0%あったことも留意すべきである。ガイドラインの適切な運用が行われている臨床場面も少なからず存在することを示唆している。

4. 本調査の限界

が主体にて行った本調査にはいくつかの限界がある。第一に、回答者の構成に偏りがある点である。本調査はみんなねっと、コンボ、すきゾ！を通じて配布されたため、回答者の64.0%が家族であり、患者本人は29.6%にとどまった。第二に、回答者の68.2%が50代以上であり、若年層の意見が十分に反映されていない。第三に、Google フォームを用いたオンライン調査であるため、デジタルリテラシーによる選択バイアスが生じている可能性がある。第四に、本調査は横断調査であるため、因果関係の推論には限界があり、経時的な認識の変化を把握することはできない。第五に、回答者はEGUIDE プロジェクトによる診療ガイドラインの紹介講演を視聴したうえで回答していることから、ガイドラインに一定の関心や情報を有する層の意見であり、社会的望ましさバイアスも否定できない。最後に、本調査ではガイドラインの種類を特定せず、「精神科領域の診療ガイドライン」全般について尋ねたため、回答者が想起したガイドラインにはばらつきがあった可能性がある。

これらの限界を踏まえると、本調査の結果は精神科領域の当事者・家族全体を代表するものではなく、みんなねっと・コンボ・すきゾ! とつながりのある比較的支援にアクセスしやすい層の意見であることも踏まえて解釈する必要がある。

5. 今後の展望と提言

本調査の結果から、以下の2点が今後の取り組みとして重要であると考えられる。

ガイドラインの当事者・家族向け普及啓発の推進である。認知度が13.1%にとどまる現状を改善するためには、みんなねっと等の家族会ネットワークや学会公式サイトでの当事者向け情報発信など、当事者・家族が日常的にアクセスしやすい経路を通じた周知が求められる。

また、臨床現場におけるガイドライン活用の促進である。本調査では、ガイドラインに沿った説明を受けていると回答した割合が15.0%にとどまる一方、「診療の時間をとってもらえない」を課題として挙げた回答者は40.8%に及んだ。限られた診療時間のなかでも、当事者・家族にガイドラインの要点を簡潔に伝える工夫や、医療者向けの研修機会の拡充が求められる。加えて、標準的な治療指針を提示するだけでなく、個々の状態に応じた柔軟な運用を心がけることが、当事者・家族の納得感と治療への主体的な参画につながると考えられる。

当事者・家族がガイドラインについて「知りたい」「説明してほしい」と強く望んでいるという本調査の結果は、今後のガイドライン普及戦略において極めて重要な根拠となる。この声を受け止め、ガイドラインが当事者・家族にとって真に役立つものとなるよう、情報提供の仕組みと臨床現場での活用を一層推進していくことが求められる。

【資料】集計表

本調査で得られた主な集計結果を、以下の表にまとめて示す。

表1 回答者の属性 (n=267)

区分	人数 (%)
性別	
男性	72 (27.0)
女性	189 (70.8)
その他	6 (2.2)
年代 (歳)	
29歳以下	14 (5.2)
30-39歳	30 (11.2)
40-49歳	41 (15.4)
50-59歳	66 (24.7)
60-69歳	67 (25.1)
70歳以上	49 (18.4)
立場	
患者	79 (29.6)
患者の家族	171 (64.0)
支援者	14 (5.2)
その他	3 (1.1)

*値は人数、括弧内は%を示す。

表2 診療ガイドラインに対する考え (n=267)

項目	あてはまる	どちらともいえない	あてはまらない
話を聞く機会があればよいと思う	248 (92.9)	15 (5.6)	4 (1.5)
内容をわかりやすく説明したものがほしい	223 (83.5)	32 (12.0)	12 (4.5)
トラブルを避けるためにも大切	217 (81.3)	42 (15.7)	8 (3.0)
治療の目安になるもの	204 (76.4)	52 (19.5)	11 (4.1)
患者にとって役立つ	201 (75.3)	54 (20.2)	12 (4.5)
自分の治療の参考になる	191 (71.5)	56 (21.0)	20 (7.5)
最新の治療方法を知ることができる	189 (70.8)	60 (22.5)	18 (6.7)
科学的根拠に基づき信頼できる	180 (67.4)	63 (23.6)	24 (9.0)
医師の治療は信頼できる	179 (67.0)	64 (24.0)	24 (9.0)
抵抗感がある (逆転)	174 (65.2)	72 (27.0)	21 (7.9)
治療の質が良くなる	174 (65.2)	69 (25.8)	24 (9.0)
医師からの説明はわかりやすい	143 (53.6)	104 (39.0)	20 (7.5)
説明がないと不安に感じる	136 (50.9)	82 (30.7)	49 (18.4)
個別配慮が足りない (逆転)	94 (35.2)	105 (39.3)	68 (25.5)
説明を受けてもわからない (逆転)	78 (29.2)	112 (41.9)	77 (28.8)
今の状態に合わない (逆転)	61 (22.8)	146 (54.7)	60 (22.5)
説明を受けることが多い	40 (15.0)	85 (31.8)	142 (53.2)

※数値は人数、括弧内は%を示す。

※(逆転)は逆転項目。スコアを反転処理し、肯定的評価が左側に位置するよう再構成している。

※列は左から「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の順。

表 3a ガイドラインの有益な点（複数回答、n=267）

選択肢	人数（%）
標準治療を知ることができる	185 (69.3)
薬物療法への知識が得られる	155 (58.1)
治療方針がわかりやすい	155 (58.1)
新規治療を知ることができる	126 (47.2)
心理的治療・社会サポート	122 (45.7)
使うとよくなりやすい	33 (12.4)
特に良い点はない	11 (4.1)

※数値は人数、括弧内は%を示す。

表 3b ガイドラインの問題点（複数回答、n=267）

選択肢	人数（%）
時間をとってもらえない	109 (40.8)
自分に合った治療をしてもらえない	87 (32.6)
困ることはない	80 (30.0)
説明が難しくてわからない	70 (26.2)
治療が変更されるととまどう	68 (25.5)
新しい治療法を教えてもらえない	27 (10.1)

※数値は人数、括弧内は%を示す。

【資料】調査票

精神科領域の診療ガイドラインに関するオンライン調査

(全 23 問)

この調査は、精神科領域の診療ガイドラインが実際に役立っているか、当事者・家族・支援者の皆さまのご意見をお聞きするために行います。診療ガイドラインとは、病気の治療や対応について、科学的な証拠（エビデンス）をもとに、効果が高く安全と考えられる方法をまとめた「治療の道しるべ」です。医師は必ずしもガイドラインに従わなければならないわけではなく、あくまで日々の診療の参考となるものです。

診療ガイドラインの存在をご存じない方でも、ご想像いただきながらご回答ください。支援者の方は「自分」を支援対象の方と読み替えてお答えください。本調査は匿名で行い、回答時間は約10分です。

◆ 診療ガイドラインに対するお考えについて

Q1 診療ガイドラインの存在を知っている。

とてもよく知っている ・ かなり知っている ・ 少しは知っている ・
あまり知らない ・ 全く知らない

上記の質問で知らないと回答された方でも、診療ガイドラインに対してご自身が感じること、思うことを想像して、下記の質問に可能な限りお答えください。

支援者の方の場合は、「自分」を支援対象の方と読み替えてください。

以下の各項目について、あなたの現在のお考えに当てはまるものをお選びください。

(5：非常にそう思う 4：ややそう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：まったくそう思わない)

Q2 診療ガイドラインは、自分の治療の参考になると感じる。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

Q3 診療ガイドラインにそった医師の治療は、信頼できると感じる。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

Q4 診療ガイドラインにそった治療を受けることで、自分の治療の質が良くなると思う。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

Q5 診療ガイドラインにそった治療が、今の自分の状態に合わないと感じることがある。

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

- Q6 診療ガイドラインにそった治療だと、自分に合った細かい配慮が足りないと感じる。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q7 診療ガイドラインにそった治療の説明を受けることが多い。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q8 診療ガイドラインを使った治療を受けることに、抵抗感がある。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q9 診療ガイドラインにそった説明がないと、不安に感じることもある。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q10 診療ガイドラインは科学的根拠に基づいて作られているから、信頼できる。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q11 診療ガイドラインの内容をもっとわかりやすく説明したものがほしいと感じる。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q12 診療ガイドラインにそった治療は、トラブルを避けるためにも大切だと思う。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q13 診療ガイドラインを使った医師からの説明は、わかりやすかった。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q14 診療ガイドラインを使った病気や治療の説明を受けても、よくわからないと感じる。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q15 診療ガイドラインは患者にとって役立つものだと思う。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q16 診療ガイドラインにそった説明で、最新の治療方法を知ることができた。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q17 診療ガイドラインの内容について、もっと話を聞く機会があればよいと思う。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
- Q18 診療ガイドラインとは「治療について患者と医師が一緒に考えられるように、たくさんの研究をまとめて作られた、治療の目安になるもの」だと思う。
5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

◆ ガイドラインの有益な点について

- Q19 医師が診療ガイドラインに沿った説明や治療を行うと、患者にとってどんな点が特によいと感じますか？（複数回答可）

- ・ 標準的な治療を受けられる
- ・ 薬についての説明がわかりやすい
- ・ 心理的な治療や社会的なサポートの説明がわかりやすい
- ・ 新しい治療について教えてもらえる
- ・ 治療方針の説明がはっきりしていてわかりやすい
- ・ 診療ガイドラインを使うとよくなりやすい
- ・ 診療ガイドラインを使うことで特によい点はない

◆ ガイドラインの問題点について

Q20 医師が診療ガイドラインに沿った説明や治療を行うと、患者はどんなことが困ると感じますか？（複数回答可）

- ・ 自分に合った治療をしてもらえない
- ・ 説明が難しくてわからない
- ・ 新しい治療法について教えてもらえない
- ・ 診療ガイドラインの説明に十分な時間をとってもらえない
- ・ 診療ガイドラインを使うとよくなりにくい
- ・ 診療ガイドラインにより今までの治療が変更されると、とまどう
- ・ 診療ガイドラインを使うことで特に困ることはない

◆ あなた自身のことについて

Q21 あなたの性別を教えてください。

- ① 男性
- ② 女性
- ③ その他
- ④ 回答したくない

Q22 あなたの年齢を教えてください。

- ① 19 歳以下
- ② 20～29 歳
- ③ 30～39 歳
- ④ 40～49 歳
- ⑤ 50～59 歳
- ⑥ 60～69 歳
- ⑦ 70 歳以上

Q23 あなたはどのような立場でお答えいただけましたか。

- ① 患者
- ② 患者の家族

③ 支援者

④ その他

◆ **ご意見・ご感想**

本調査に関するご意見がございましたら、ご自由にお書きください。

(自由記載)